

町勢の概要

1. 位置・地勢・気候・周辺市町との関係

町は、山口県南東部に位置し、瀬戸内海に面している、東西8キロメートル、南北15.2キロメートル、面積50.42平方キロメートルほどの大きさの町です。北西部は山岳地帯となっており、この山岳に源をなす小河川が合流して田布施川となり、中央部を貫流し、南部の瀬戸内海に注いでいます。

南方海上1,500メートルの位置に馬島があり、また、北には田布施町の飛び地として小行司地区があります。町の中央部は平坦地で市街地をなし、JR山陽本線田布施駅を中心に道路網が四方に広がっています。

気象は、温暖で降水量が少なく、日照時間の多い瀬戸内海型気候区に属しています。周辺市町との関係では、柳井市、光市、平生町との通勤・通学流動が目立って多く、一体的な生活圏を形成しています。

転入出の移動相手先としては、同じ生活圏域にある柳井市、光市、平生町、周南市が多くなっており、いずれも転入出がほぼ均衡しているものの、転出先の上位には周南市に続いて広島市が入っています。

【位置及び近隣市町図】



2. 歴史・沿革

○昭和30年1月1日、新生田布施町スタート

町村合併促進法の公布など政府の町村合併促進の動きと併せて、山口県でも昭和28年11月に町村合併促進審議会を設置、昭和29年3月には「山口県町村合併計画促進策定上の基本方針」「山口県町村合併全体計画」を決定、町村合併に向けて具体的に動きだしました。新田布施町は、昭和29年12月27日付官報に告示され、昭和30年1月1日、旧田布施町役場を新役場とし、城南・麻郷・麻里府の各村役場を出張所として発足しました。

○生活基盤整備の進展、新庁舎の完成、まちは順調な発展の軌道に

昭和38年には、上水道やゴミ処理施設など、生活基盤の整備が急速に進んだ時期でした。また、昭和40年には学校給食センターが開設され、小学校と中学校への給食の配送が始まりました。

昭和45年2月に新庁舎が完成し、庁舎移動に併せて機構改革も行われ、住民と役場を結ぶ窓口として町民課が新設されました。この時期、広域連携も本格化し、昭和46年には、徳山・下松・光・新南陽の4市と田布施・大和・熊毛・鹿野の4町で、周南広域市町村圏振興整備協議会が発足しました。

○企業誘致や住環境の整備が進み、人口も増加

高度経済成長の進展や、新幹線、高速道路網といった社会基盤の整備は、静かな農村地帯であった町の性格を少しずつ変えていき、労働面でも、農業を主とする第1次産業から第2・3次産業への従事者が増えていきました。昭和46年の周南広域市町村圏への加入後は、徳山市など産業の集積する県央部に対するベッドタウン的性格を持った勤労者の町として位置づけられました。

昭和30年代から40年代にわたるわが国の高度経済成長とともに、農村から都市への人口流出が激しくなり、田布施町の人口も減少が進みました。しかし、米出工業団地を中心とした企業誘致や住環境の整備が進み、昭和50年代には人口が回復に転じました。

○笑顔と元気あふれる住みよいまちの実現へ

第5次田布施町総合計画の目標である「笑顔と元気あふれる住みよいまち田布施」を具現化するため、「美しいまちづくり推進条例」によりまちづくりの原点を定めた。「美しいまちは、人々の定住意欲を高め、町を発展させる原動力になり、民間と行政が一体となって美しいまちを実現する」という趣旨は、その後の第6次田布施町総合計画にも継承された。

平成23年には、耕作放棄地の拡大、担い手農家の減少などの農業をめぐる問題の振興策として「国営緊急農地再編整備事業」が始まり、基盤整備により新たな「農業モデル」となる町独自の取り組みがスタートした。

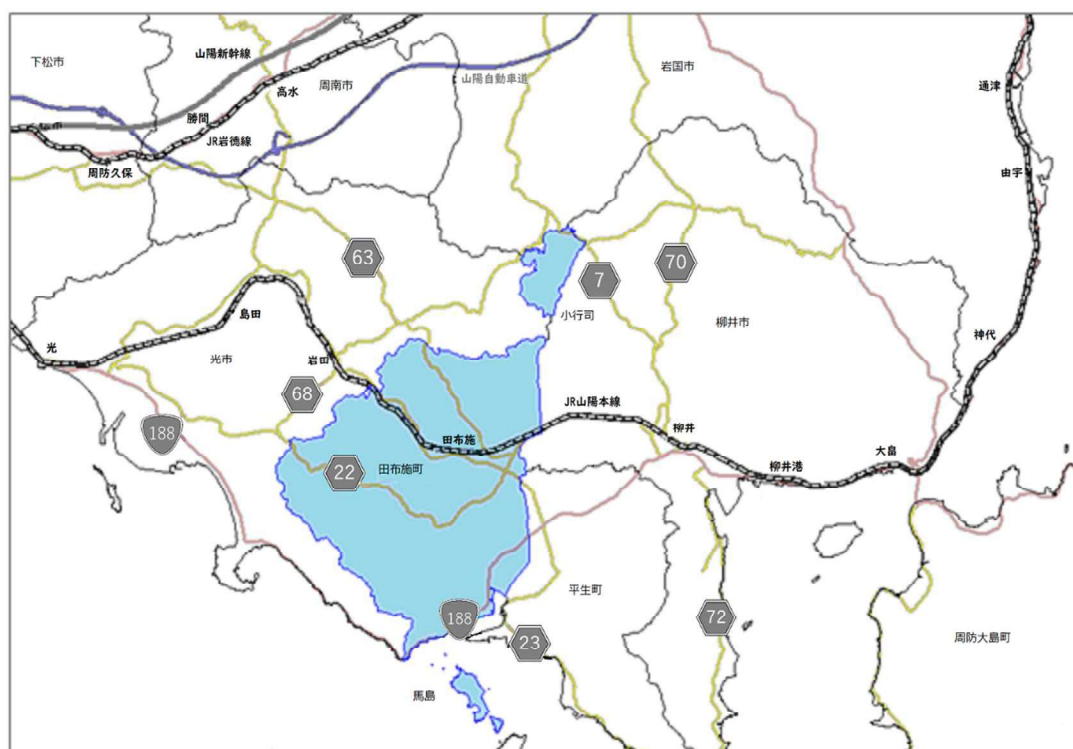
令和3年には、光ファイバーによる高速インターネットサービスが馬島を除く町内全域で利用可能になり、デジタル社会に対応した行政サービスのオンライン化や防災や子育てなどアプリケーションを利用した情報発信などが本格的に始まった。

3. 交通

町内の幹線道路は、国道188号及び県道が主体です。県道は、主要地方道が4路線、一般県道が5路線あり、周辺市町との連絡、国道へのアクセス、町内連絡と一体性の確保に大きな役割を果たしています。

公共交通では、町の中心部には山陽本線田布施駅があり、バス路線は民間会社が運行する国道188号の1路線と、柳井市、平生町、田布施町の1市2町による共同運行5路線があります。また、馬島麻里府航路は、平成18年度より平生町との共同運航による馬島・佐合島航路として運航が確保されています。

【広域交通網図】



4. 人口と世帯

本町の人口は、平成2年以降をみると、平成2年の16,555人から減少傾向で推移しており、令和2年現在で14,439人となっています。

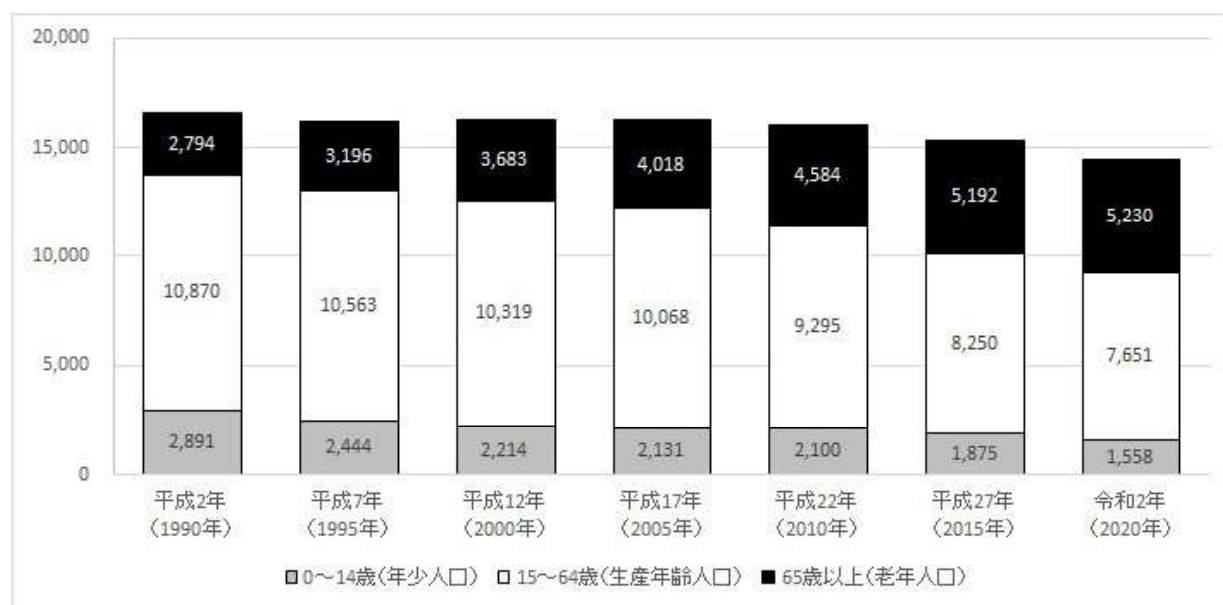
構成比をみると、15～64歳の生産年齢人口の割合の減少と65歳以上の老年人口の割合増加がみられます。0～14歳の年少人口は平成2年の17.5%から減少しているものの、平成17年から平成22年は13.1%と横ばいで推移し、平成27年度以降は再び減少に転じています。

年齢3区分別人口構成比を全国・山口県と比較すると、老年人口割合は全国・山口県と比べて高くなっています。年少人口割合は令和2年では山口県と比べて若干高くなっています。

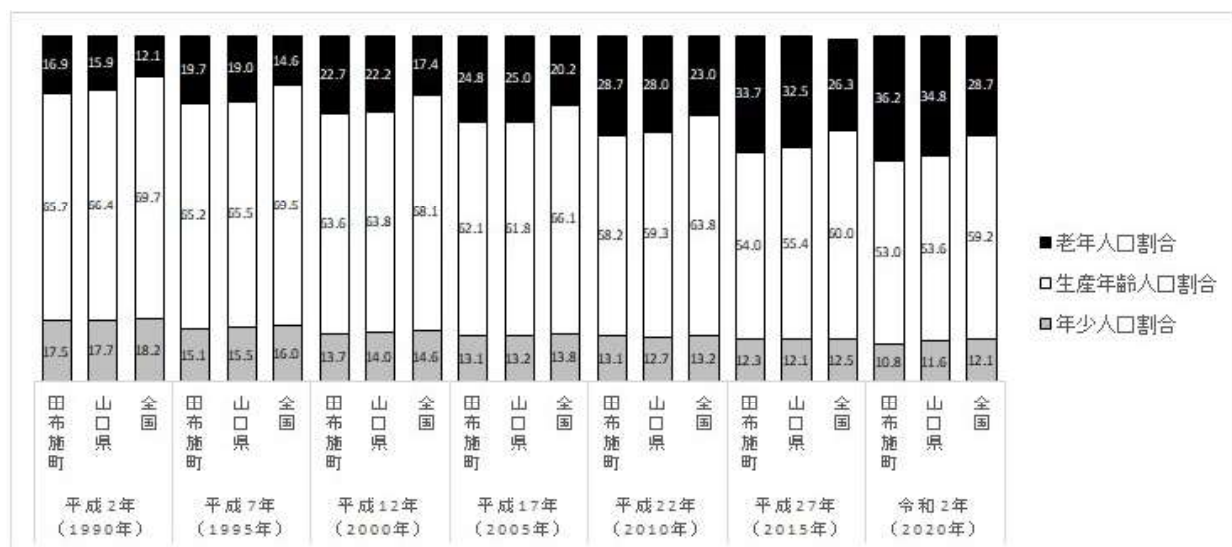
平成2年を基準とした人口の伸び率をみると、本町及び山口県は人口減少で推移していますが、山口県と比べて減少率はゆるやかなものとなっています。

今後は、あらゆる分野で本格的な少子高齢社会の到来を見据えたまちづくりを進める必要があります。

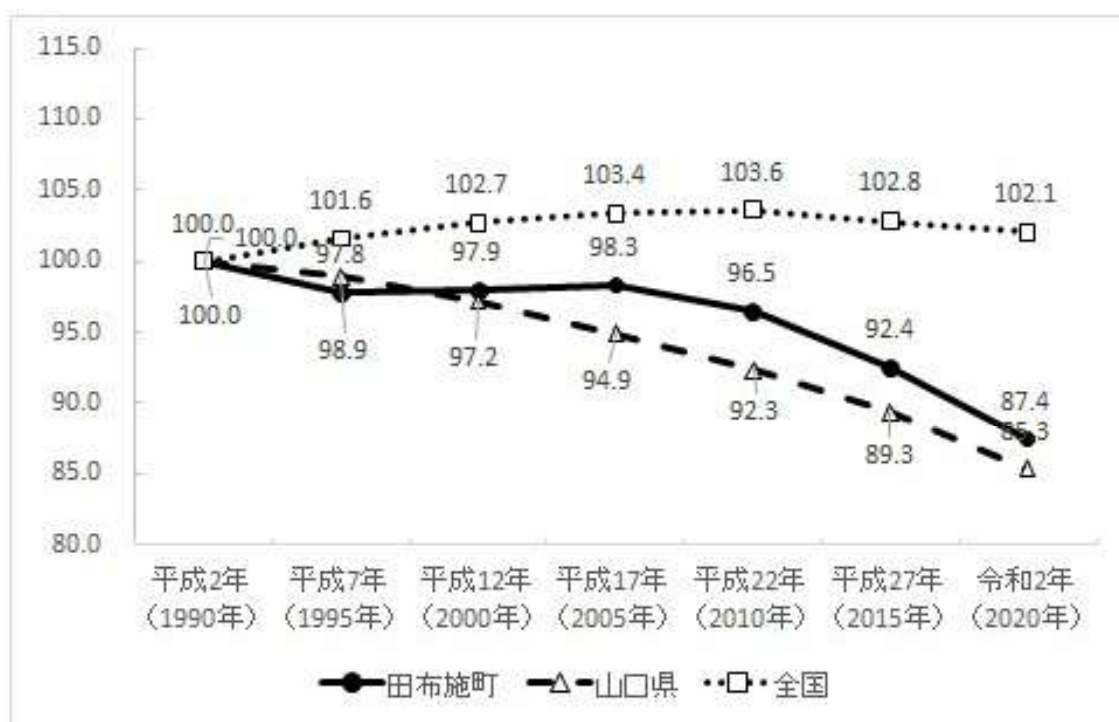
【人口の推移 年齢3区分別人口】



【年齢3区分別人口構成比の全国・山口県との比較】



【平成2年（1990年）を基準とした場合の人口の伸び率】



5. 就業人口

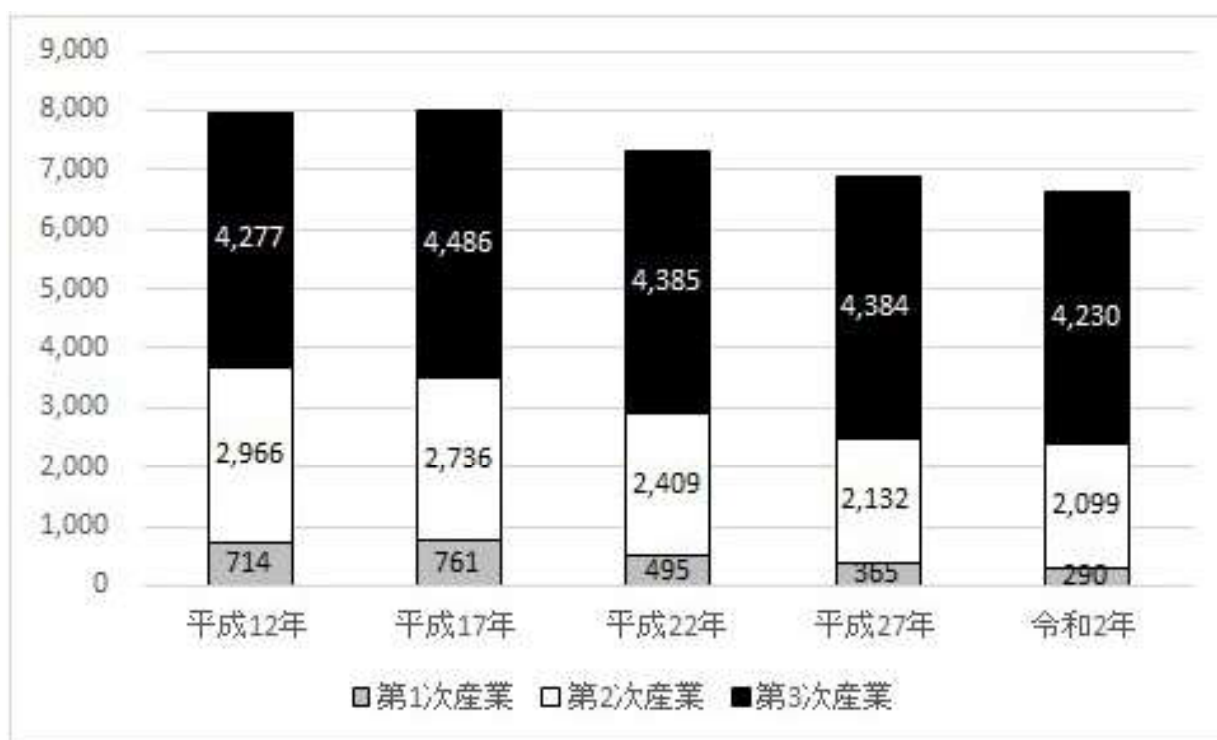
令和2年の産業人口は6,881人と、平成12年の7,957人から減少となっています。平成12年から比較して、第1次産業、第2次産業人口の割合が大幅に減少し、第3次産業人口の割合は少し減少しております。

男女別の産業人口をみると、男性の第2次産業人口が女性と比べて高くなっています。

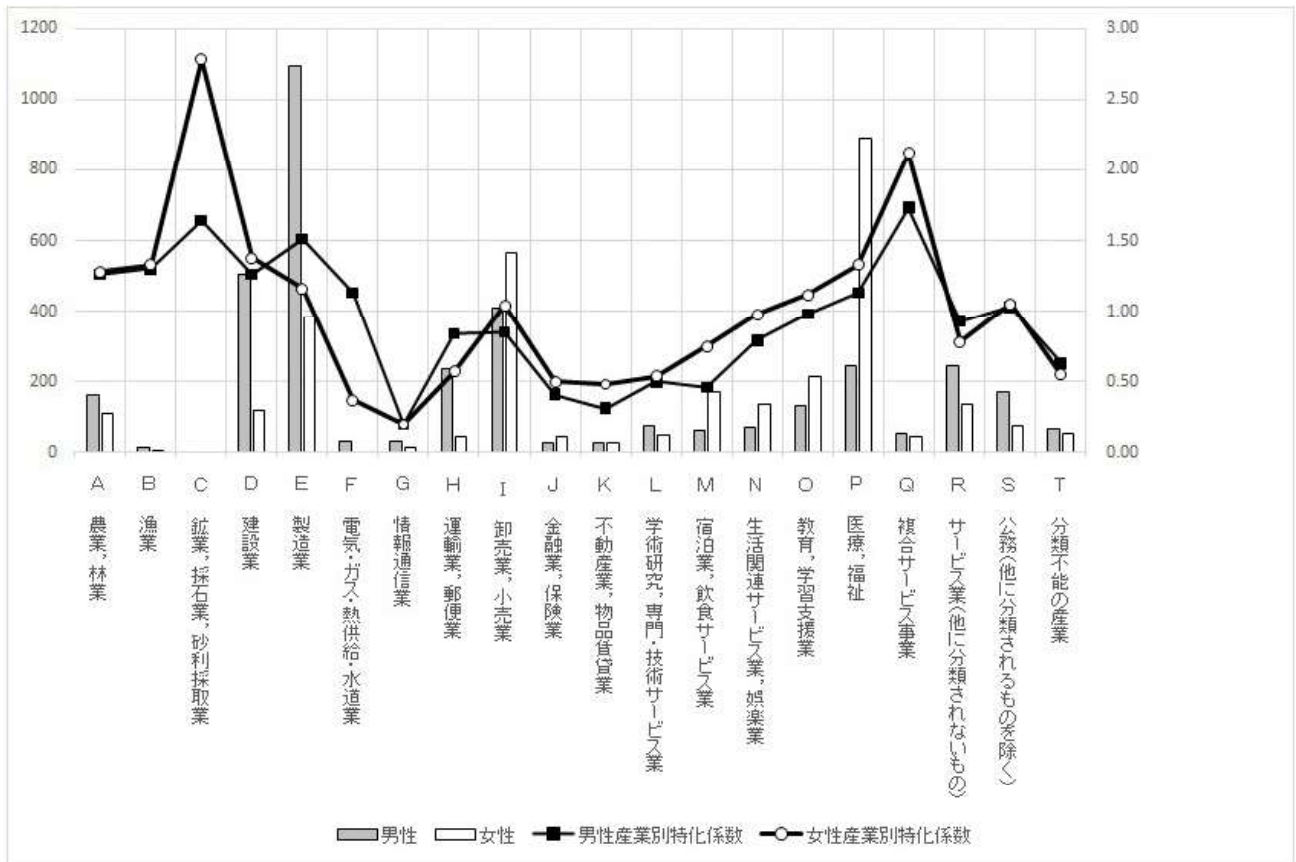
男女別産業別就業人口数をみると、男性では「製造業」「建設業」「卸売業、小売業」の順に多く、女性では、「医療、福祉」「卸売業、小売業」「建設業」の順に多くなっています。

対全国の産業別特化係数をみると、男性では「複合サービス事業」「鉱業、採石業、砂利採取業」「製造業」、女性では「鉱業、採石業、砂利採取業」「複合サービス事業」「医療、福祉」が高くなっています。

【産業別就業者の推移】



【男女別産業人口と産業別特化係数（全国値との比較）の状況（令和2年）】



単位：人、特化係数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
男性	162	15	3	503	1092	30	32	236	408	28	26	77	62	72	133	244	52	246	169	66
産業別特化係数	1.26	1.30	1.64	1.26	1.51	1.13	0.20	0.84	0.85	0.41	0.31	0.50	0.46	0.79	0.98	1.13	1.73	0.93	1.03	0.63
女性	108	5	1	118	382	2	13	46	564	45	29	49	169	136	215	889	45	138	75	53
産業別特化係数	1.28	1.33	2.78	1.38	1.16	0.37	0.20	0.57	1.04	0.50	0.48	0.54	0.75	0.98	1.12	1.33	2.12	0.78	1.05	0.55
合計	270	20	4	621	1474	32	45	282	972	73	55	126	231	208	348	1133	97	384	244	119

の塗りつぶしがされている値は上位3項目